

神、
そらにしろしめす、
なべてあの世は事もなし

沢庵

川霧が立ち込めている。自分以外何も存在しない真白の世界が形成されているが、木々の隙間から指す光芒のため暗さは全く感じない。幻想郷は朝を迎えていた。

立ちこめる川霧のため姿容は見えないが、三途の川の水を掻く櫂の音が一定のリズムを保って方々から聞こえてくる。全ての幽霊を彼岸に運ぶためには早朝から出勤しなければ間に合わない。今日も此岸は渡河待ちの幽霊で満ち溢れているだろう。

小野塚小町もその例に漏れず、渡船を走らせていた。彼女の舟は軽快に水面を走る。それはまだ此岸の幽霊を載せていないからか。空を仰ぎ見て陽光を反射する霧のまぶしさに目を細めては、のんびりと舟を漕ぐ。

「なんて良い天気なんだ。霧間から指すお天道様の光ほど、体にしみわたるものは無し。気を抜いたら眠ってしまいそうだ」

現状に満足したように満面の笑みを浮かべると、彼女は舳先が此岸に向いている事を確認してから、またゆっくりと舟をこぎはじめた。

こん、と乾いた音が鳴り響く。此岸の棧橋に舟が到着した証拠だ。

「いやはや、もう到着してしまった。もう少し時間がかかると思ったんだけどねえ」

空を見遣ると、太陽はもう完全に姿を現していた。小町はゆつくりと周りを見渡す。周りに渡船が見えない事を確認すると、彼女は満足げに渡河待ちの幽霊を自らの舟に招き入れた。彼女も何も考え無しに遅く到着している訳ではない。善行に善行を重ねた幽霊は他の死神船頭が連れていく。徳の高い幽霊は短時間で渡河できる上、渡し賃も多く儲けに直結する上客だが、彼らの経験はたいして面白くない。むしろ悪い事をしてきた奴の方が、波乱万丈奇々怪々な経験を積んでいる事が多く、総じて面白い。どんけつに陣取ること、面白い経験を持った幽霊を一人占めに行っているというわけだ。これが彼女の日課でもある。彼女は再び、あたりを見回す。

「今日も幽霊が少ないねえ。人の寿命も延びていると聞くし、そろそろ渡河のピークかねえ。これであたいの仕事が減ってくれば助かるんだが；そんなに世の中甘くはないね。せいぜい『とても忙しい』が『忙しい』に変わるくらいか」

と一人ごちてからからと笑う彼女を舟に乗ろうとした幽霊が不審そうな視線で見つめていた。「ほれほれ、さっさと乗んな。ぐずぐずしていると、あんたを置いて行っちゃまうよ。さすれば次の渡河は二百年後だ、その間、お供え物も口にできない。あんたもそんなに待っちゃいられないだろう」

幽霊は急ぎ舟にのりこむ。二百年後など口から出まかせだが、彼女も時間は惜しい。できるところはさっさと終わらせるのが信条だ。無駄な事に時間をかけるほど彼女は暇ではない。

「よしよし、それじゃあ出発するのでしょうか」

櫂で棧橋を軽く押すと、舟は霧の中へと溶けていった。不意に視線を感じて振り向くと、棧橋に猫らしき生き物がいた。しかし、すぐに辺りは霧に覆われて見えなくなってしまった。

此岸に幽霊以外が来る事なんてめったにない事だが、全く無い事でもない。小町はすぐに興味を失い、舳先を彼岸へと向けた。

「この船はあー、此岸発うー、彼岸行きいー。諸般の事情により、急遽行き先を川の中へ変更する事もございますが、どうかお気になさらず、船旅をお楽しみください。到着時刻は知りません。自分の心に聞いてください」

幽霊が居住まいを正した気配を感じ、小町は少し満足した。少しくらい萎縮してもらわなければ、面白い話は聞けそうもない。死神が馬鹿にされてはおしまいである。ここからどれだけ話を聞きたすかが小野塚小町の腕の見せ所だ。

「よーっし、一丁やってやりますか」

そう言うって腕まくりをした彼女を見て、幽霊はまた少しだけ怖気づいたように見えた。

長い長い船旅を終え、小町の舟は彼岸へと到着した。相変わらずの川霧で辺りの景色は朧だ。

「さあさ、長い船旅もおしまいさ。これからあんたは地獄の裁判にかけられる。うちのボスの前じゃあ、嘘も何も通用しないから、まあ気を楽にしているといいんじゃないかな。今からあたふたしても仕方なし。さあさあ、行った行った。ここからはまた別の死神が案内をしてくれるから……」

そういつて棧橋の方に目を凝らした瞬間、小町の表情が強張った。

「小町、ずいぶん遅い到着ね。他の死神たちはもう二回は幽霊を運んで来ているわよ。それに比べて、貴方はまだ一回目……。いったいどこで油を売っていたらこんな遅い時間になるのかしら」

棧橋に現れたのは気の知れた死神ではなく、地獄の最高裁判官、四季映姫だった。突然の出来事に驚いたのか、小町は明後日の方向を眺めてすつとぼけを決め込んでいる。

「いやあ、まさか四季様直々に幽霊を迎えに来るなんて、思ってもみませんでしたよ。なんですか、この幽霊はそんなに大層な事をやってのけたんですかい」

「この幽霊が何をやってきたかなんて、今ならあなたの方が良く知っているんじゃないか。それに、私は『どこで油を売っていたのか』と尋ねたはずですよ。あなたは今、人の話をう

やむやにしてしまおうと考えたのではないですか。全く、あなたは少し言い訳が過ぎる。いいですか、多くの幽霊を早く運ぶ。これが最も効率的で、最も儲かる方法なのです。それを第一に担っているのが貴方達死神船頭であって……」

また四季様の説教癖が始まった、と内心思いながらも小町は姿勢を正してボスの有り難い話を傾ける。先ほどから幽霊がどうしていいのか分からず右往左往しているが、映姫は構うことなく話を続ける。

「なに、怒られているのはあたいの方、いつもの事さ。あんたは気にせず、のんびんだらりと待ってればいい。すぐに案内役の死神が姿を現すはずさ」

そう言って笑みを投げると、幽霊は少し安心したように見えた。しかし、その笑顔を四季映姫は見逃さない。

「小町、人が真面目に話している時に笑うとは何事ですか」

「きゃん」

「はあ、人の話も聞かないとは、どうしようもないですね。一度私の裁きを受けてみますか……まあ、良いでしょう。この幽霊は私が裁判所まで連れて行きます。あなたは自分の仕事に励みなさい。それが今の貴方が積める善行です」

「済みません、済みません。真面目に働きますから」

「全く、口ばかり達者ですね。真面目に働けるのであれば、はじめから働きなさい。不言実行です」

「はい分かりました。すみません。もうしません。まじめに働きますから」

映姫はため息をついて踵を返す。小町は映姫がふり返ったのを確認してから、少しだけうなだれた。

「ああそれと」

映姫が急に振り返る。

「はいっ」

意表を突かれた小町は必要以上に背筋を伸ばして返事をする。

「今日の仕事が全て片付いたら、私のところへ来なさい。いいですか、全てが片付いたらですよ。全く、最初はこれだけ伝えようと思ったのに、あなたがあまりにも遅いので忘れてしまふところでした」

そう残すと、映姫はゆっくりと裁判所に向かって歩み始めた。時折、幽霊が不安げに振り向くので、小町は軽く手を振って幽霊を見送った。

その日の小町の仕事っぷりはめざましいものだった。時間がかかりそうな幽霊を運ぶのは変わらなかつたが、はじめの遅れを取り戻すかのようにきびきびと働いた。終業時間ぎりぎりに一日のノルマを達成した小町は、急ぎ是非曲直庁の四季映姫の控室へと駆けていった。

「小野塚小町、はいりまーす」

威勢の良い掛け声とは対照的に、どうぞ、と冷静な声が聞こえてきた。その声を確認してから

「失礼しまーす」

と高らかに叫びながら、四季映姫の部屋へ入って行った。小町はすがすがしい表情をしている。

「業務時間内に仕事を終えるなんて珍しいわね」

映姫は書類に顔を向けたまま淡々と応じる。

「そりゃあもう、四季様に呼ばれたとあっちゃあ、あたいだって頑張りますよ。たとえ火の中、ってね」

「ふふっ、全く調子が良いのね。しかし、貴方はノルマを達成しただけなのよ。それも珍しく、という修飾までついてね。まあ、今日のところはお疲れ様、と言っておきましょうか」
映姫は笑みを浮かべ、柔和なまなざしを小町に向けている。それを受けて、いやあそれほどでも、と顔を赤らめ小町は頭を掻き始めた。

「まあ、いいわ。今日はあいにく真面目な用事なのよ」

映姫が急に真剣なまなざしに変わったのを見て、小町は意外そうな表情になった。

「あらら、今日は真面目なお話なんですか。…すみません、急にお腹が痛くなつてですね…」
「はいはい、貴方の嘘は全てお見通しですよ。…ねえ、小町。最近何か変わった事が起こつていと思わない」

「変わった事、ですか。そんな感じはつゆも感じませんが、強いて言うなれば、最近幽霊の数が減ってきたかなあ、という事くらいですけど」

「そう、それなのよ。最近、幽霊の数が少しずつ減つて来ているの。貴方の仕事が早く終わったのも、もしかしたらこれが原因かもね」

「そんなあー。私だつて今日は頑張りましたよ。今日は」

映姫は笑っている。悲しそうな顔をしている小町を見るのが楽しいのかもしれない。

「そうね、今日は頑張っていたわね。でも、このままじゃ是非曲直の収入も減つて、私達の給料も下がつて、もうさんざん。何か対策を打たなくちゃいけないという訳よ」

「なるほど、給与が下がるのはいただけいですね、帰りに呑む酒代が無くなつちゃう」

「小町もそう思うでしょう。そこで、小町」

はい、と適当に返事を返す。

「明日からしばらく、船頭の仕事を休んでちょうだい」

はい、と生返事を返して、数秒間、沈黙が漂った。映姫はじつと俯いている。

「はい？」

「明日からしばらく、船頭の仕事を休んで欲しいのよ」

小町は眼をまんまるに見開き、映姫の机にまで駆け寄った。

「え、ちよ、それはどういうことですか。クビってことですか。いやいや、まさかそんな。

あたいは今日も頑張っていたじゃないですか。四季様も今日は働いたと褒めてくれたじゃないですか。あたい、いやですよ。クビなんて。あ、あれですか、あたいの稼ぎが少ないからってことですか。それは、まあ、確かに……。いや、いやいや、すみません、すみません。明日から、明日から真面目に働きますんで。もう少しだけ待っちゃあくれませんかね」

それまで下を向いていた映姫の体が震えだす。小町は息を飲んでその様子を見つめている。突如、映姫の体がくの字に折れ曲がり、可愛い笑い声が沈黙を突き破った。小町は何が起ったのか分からず、茫然と映姫の方に目を向けている。

「あはっ、私は『船頭の仕事を休んで欲しい』と言っただけで、仕事を首にするとは一言も言っけませんよ。」

「そんなあ、驚かせないで下さいよ」

力を失い、小町はへなへなとその場に座り込んでしまった。

「まさか、こんなに驚くとは思わなかったわ。…それにしても、理由を求める前に釈明したりと、解雇される心当たりはたくさんあるみたいね。そんな仕事ぶりだと、いつか本当に解雇されますよ。だいたい、何が『明日からは真面目に働く』ですか。本当に申し訳ないと思ってるなら、今すぐにもでも働きなさい。本当に働くことが大切だと頭で判っているのなら、実行なさい。あなたは少し、怠慢が過ぎる。そもそもですわね…」

「ややっ、それよりもなんであたいが船頭の仕事を休まなければならぬんですかねえ。あ、四季様があたいの事を養ってくれるんですか」

「ばかも休み休みいなさい」

自分の言葉を途中で遮られたからか、語気には棘が含まれている。

「幽霊の数が減っているの、少し原因を調査してほしいのです。実際、幽霊の数が減って来ているので、船頭が少し余り気味でした。そういう訳で、調査員として貴方が抜擢されたわけです。幻想郷の地理や人妖にもなじみのある貴方がね」

もちろん、業績が悪かったというのも重要な要素だったけど、とポツリとつぶやいたが、小町の耳には入らなかったようだ。

「なるほど、確かにあたいは、幻想郷の事に関しては死神の中では一二を争うほど知っているとは思いますが、それでも船頭の仕事を離れるってえのはやはり寂しい物がありますねえ。」

ちらちらと映姫の様子をうかがってみるが

「まあ、もう決まった事だから私にはどうしようもないわ
とにべもない態度を取られてしまった。

「イエス、ボス」

溜息とともに重く言葉が吐き出された。